

## みみずの歌



佐佐木 邦子

ある若いおかあさんが、幼い子供に日本の古い子守歌を聞かせるのは良いことなのでしょうか、といった。寝るとき子供にいろいろな音楽を聞かせるのだが、古いわらべ歌のCDをかけると悲しそうな顔をし、泣きそうになることもあるのだそうだ。子供が悲しい気持ちで眠るのでは、親としては考えてしまうという。「もう少し大きくなってから、おかあさんと一緒に聴いたらどうでしょう」と私はいつてみた。

確かに日本のわらべ歌には短調が多い。短調の音楽は長調に比べるとずっと寂しい。子守歌も例外ではない。子守歌の中にはそれを歌う子守り子の境遇が歌詞になったものも多く、身売り同然にやってきた子守り娘の嘆きなど、シビアな生活苦がもろに出た歌もある。メロディだって、気持ちが安らぐより、寂しさを掻き立てられるかもしれない。しかしそれでいて、きれいで、懐かしくて、心の芯にシーンと染みてくる。おとなになって思い出すのは、むしろこういう歌の方ではないのか。「子守歌」というから幼い子供だけのものと思いがちだが、「子供のため」という制約をはずしてみた方が、良さがよくわかりそうだ。

音楽でも絵でも文学でも、日本人は昔から、寂しさや悲しさに積極的な意味を見出してきたような気がする。病や死にさえも価値を認めた。それが日本文化の特徴といってもいい。平氏が源氏に追われて西国へ逃げ、明日にも滅亡する

かもしれないというとき、平氏の公達（きんたち）は、おびただしい死者が浮かんでいる夜の海で笛を吹いていた。笛の名手である若い男が、湖の畔（ほとり）でうっかり笛を吹いたために大蛇に見込まれ、水に引き入れられた話もある。男は再び戻ってこなかったが、湖の底から美しい笛の音が聞こえると人はうわさした。

日本では人だけでなく、大蛇や物の怪も音楽を愛する。みみずのようなものでさえ歌う。昔、蛇は目がなかったが歌が上手で、みみずは目があったが声は出なかった。みみずは歌えることが羨ましくてならず、蛇に頼んで目と声を取り替えてもらった。それからというもの、みみずは土の下で歌を歌っている。静まり返った夜更け、耳を澄ましていると、みみずの歌が聞こえるという。

土の下から聞こえてくるかすかな歌声を想像すると、ひどく寂しくて、同時にとんでもなく美しい。寂しいことは悪いことか。楽しさ華やかさを求めながらひたすら走ってきて、ふと気付いたら足元が危なくなっていた。寂しさの中にある積極的な価値を、今のような時代だからこそ改めて考えたいと思う。

2010.4 こもれび第9号